

第58回

国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト



優 秀 作 品 集

特賞（山口県知事賞）

日本国内外で困っている人々のために、自分には何ができるか。
～私ができる恩返し～

光市立島田中学校3年 宮本 愛(みやもと あい)

日本はたくさんの災害が起こります。私は、今年の7月に起きた西日本豪雨で、私の住んでいる地域が水に浸かってしまいました。生まれて初めて災害というものを体験し、私を含めた被災者の人達は不安でいっぱいの日々を過ごしました。

体育館生活が終わり、家に帰ると床上浸水になっており、泥が上がって、物が散らばっていました。本当にニュースを見るような光景でとても悲しくなりました。私の家よりひどい家もあり、たくさんの人が泥を出したり、家具を捨てたりと、大変な作業をしていました。

そんな時、助けてくれたのが外国人のボランティアの方々でした。私の家はボランティアを申し込んでいなかったのですが、すごく救われた気持ちになりました。たくさんのボランティアの方々のおかげで、現在の私たちの地域は、以前のようにみんなが安心して暮らせています。

このような体験をして、私は恩返しをしたいと思うようになりました。でも、私はまだ中学生で一人で外国に行けるほどの年ではありません。だから私は、日本にいて、私たち中学生でも出来ることを考えました。

例えば、GUなどに設置してあるいらなくなった衣服を入れるボックス。これは、洋服を買うお金のない外国人に届けるシステムとなっています。これなら今の私でも恩返しすることができます。このような活動は他にもあり、ペットボトルキャップを集めてワクチンに変える活動や発展途上国への募金などがあります。小さなことで救える命があることをあらためて知りました。今からでもできることはやっていこうと思います。

私が大人になって、もし、外国で災害が起こり、たくさんの人が悲しんでいたら…。私は必ず助けにいきたいと思います。私は、力仕事とか大したことができないかもしれませんが、でも、被災者の方々に寄り添ったり、やさしく声をかけることができます。実際に私が被災者になっていた時に、外国人のボランティアの方がやさしく笑いかけてくださり、悲しかった気持ちから、幸せな気持ちになったことを覚えています。だから、今度は自分が悲しい気持ちから救ってあげたいと思いました。

しかし、外国に行って、ボランティアをしたり、コミュニケーションをとったり

するためには英語を話さなくてはなりません。学校の勉強をきちんとやり、将来につなげていくことも恩返しになると私は思います。だから、日々の学校生活を大切に、英語は最も得意な教科であるので、もっと成績を伸ばしていきたいです。そして、いざ外国へ行くとなったときも、きちんと自分の気持ちを伝えられるようになりたいです。

私は、この初めて体験した災害で、怖くてたまらなかった時に、私たちに手をさしのべてくれた外国人ボランティアの方々のことを一生忘れません。違う国同士、戦争をしているところもあります。だけど、国境など関係なく、手と手を取り合い、助け合っている姿ほど素晴らしいものはありません。今回の災害でとても大切なことを学びました。

今の私にできること。それを見つけて、一生懸命にやっていくことが最大の恩返しになる気がしました。

特賞(日本国際連合協会山口県本部長賞)

食べ物などの限りある資源を大切にするために、自分には何ができるか。 ～フードバンク～

山口市立大殿中学校1年 杉山 統(すぎやま すばる)

夏休みのある日、僕は母に連れられてフードバンク山口の倉庫に行きました。その時まで僕はフードバンクのことは全然知らなくて、携帯電話会社の名前と間違えたくらいでした。

倉庫はビルの二階にあり、部屋いっぱいにはスチールの棚が並べられていました。棚には上半分を切り取った段ボールが並んでいました。母に、

「中を見てごらん。」

と言われてのぞくと、お菓子やラーメンなど様々な食品が入っていました。箱にはラベルがついていて、調味料、食油、穀類、粉類、インスタント食品、調理済み食品、レトルト食品、缶詰、菓子、飲料、農水産物、加工品、乳幼児食品、災害備蓄品などと書いてありました。

ここでは、食べられるのに捨てられる食品を集めて、必要な人に届ける活動をしているそうです。僕は母に、こういう食品はどこから来るのか聞いてみました。

フードバンクがもらう、まだ食べられるのに要らなくなった食品のことを「未利用食品」「食品ロス」と言うそうです。一般家庭の未利用食品は、フードバンクポストというボックスに入れてもらいます。山口市では、山口県庁のロビーや、食品スーパーアルクの葵店に置いてあるそうです。他にも、お店の商品の印刷ミスや缶や外箱がへこんだりして売れないもの、イベントなどでのあまりもの、非売品、試供品、災害備蓄品の入れ替え品をもらいます。

中でも僕がびっくりしたのは、食品企業からもらうたくさんの返品です。日本には、三分の一ルールというものがあり、賞味期限の残りが少なくなるとお店で売れなくなるので、捨てられてしまうというのです。

「日本人は牛乳や生めんを買う時に、棚の奥からなるべく賞味期限の長いものを取ったり、レトルトや缶詰など長期間持つものを余分に買ったりするやろ？やから、賞味期限が近付いたものは売れんけん、まだ食べられるのに捨てられるんよ。」という母の説明を聞いて、なんてもったいないんだろうと思いました。

家に帰ってから、フードバンクについて調べてみました。最初のフードバンクは、アメリカで生まれたそうです。その内容は、スーパーで廃棄される食品をもらい、

協会の倉庫を貸してもらって、飢饉に苦しむ人たちにあげる活動でした。

それから、フードバンクは、世界中に広がっていき、ヨーロッパ、南アフリカ、アフリカ、アジアへと広がっていきました。そして、二〇〇二年初めて日本でフードバンク活動が始まりました。そしてそれから全国に広がり、今では、八十ヶ所以上のフードバンク活動場所があります。

このようにフードバンク活動は、世界中に広がっていますが、冷蔵、冷凍食品や、お弁当やお総菜などの調理品は扱えないことが多いため、フードバンクだけで食品ロスをなくすことはできません。日本では、毎日ひとりおにぎり1個の食品を捨てていることになるくらいの食品が捨てられているそうです。それは、食品だけでなく、そのための生産、加工、輸送、販売、すべての工程にかかったエネルギーを無駄にすることになり、本当にもったいないことです。

やはり、僕たちひとりひとりが、毎日の生活の中で食品ロスを出さないように心がけることが大切です。僕ができそうなことを考えてみました。

- ① 食べられる分だけを買う、注文する。
- ② 作ったもの、買ったものは食べ切る。
- ③ すぐ食べるなら賞味期限の近いものや見切り品を買う。
- ④ 食べ物の好き嫌いをなくす。

また、今度はフードバンクの活動も手伝ってみたいです。僕ができることを、少しずつでもできるといいと思います。

優秀賞(公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞)

食べ物などの限りある資源を大切にするために、自分には何ができるか。 ～私にできる小さなこと～

光市立島田中学校3年 尾崎 萌香(おさき もえか)

私は飢餓について、まず飢えで苦しんでいる人はどういう気持ちでいるのか考えました。おなかをすかせていることがあたり前だと思っているのか、食品ロスの存在を知っているのか、様々な思いが頭に浮かびました。やせた子供が補助食を頬張っている写真を見たとき、かわいそうと思う自分に対し、その子供は笑顔を見せていて、食べることのありがたさや喜びが表れていました。

これから、食料不足が大きな問題になると思います。人口が増え続けている以上、さらに深刻化していくはずです。しかし、農地を増やすどころか、工業化により農地が減っている国もあります。限られた土地で全人口を養うには、革命的な技術革新が必要だと思います。

しかしこれは未来の話であって、現在食料不足であるとは言い切れないと思います。食品ロスが非常に多いからです。私は、食品ロスを減らすための「フードバンク」というシステムを知り、興味をもちました。

フランスでは、スーパーマーケットで売れ残ったり、売れない食品の廃棄が法律で禁止されました。そのため、捨てられるはずだったそれらの食品はフードバンクに提供され、生活困窮者に配られています。このように各国が食品ロス削減に向けて取り組んでいることを知りました。

日本にもフードバンクがあり、期限切れの食品や売れ残った食品を提供しています。それらの食品は、児童養護施設や福祉施設に配られたり、炊き出しに使われたりしているそうです。この時、私は初めて、貧困というのはアフリカなど遠い国の話ではないことに気づきました。私が食品を捨てるすぐそこに、食べるものがなく苦しんでいる人がいることを思い知らされました。

しかし食品ロスはまだ多くあります。私はその原因の一つに賞味期限や消費期限があるのではないかと思いました。この期限はかなり短めに設定されています。また、賞味期限の三分の一までを小売店への納品期限、次の三分の一までを消費者への販売期限とする、「三分の一ルール」があるようです。私は賞味期限を延ばして廃棄を減らすべきだと思いました。しかし期限を延ばせば、私も含め消費者は不信感をもち、安全ではないのではないかとマイナスの評価をしてしまうでしょう。私の家族は、多少の期限切れは気にせず、もったいないからとおいしく食べています。しかし、期限が切れたものを商品として店に並べることなどありません。また、欠

品を防ぐために多く納品している店がほとんどです。店としては、お客様に満足してもらえるようにという思いがあるのだと思いますが、私たち消費者にとって満足とはどういうことでしょうか。安全なものもいい、品切れだと困るという私たちの欲が、結局、廃棄の増加につながっているのです。このような考えは、食べることはあたり前という感覚があるから生まれます。改めて、あたり前であるという意識を変えないといけないと思いました。

私は、先進国が率先して食品ロスや飢餓の問題に向き合うべきだと思います。確かに、日本の廃棄される食品をアフリカに輸出するには膨大なコストがかかります。しかし、食べ物が少ないのはアフリカだけではありません。どの国にも、もしかしたら自分のすぐそばに、飢えで苦しんでいる人がいるかもしれません。そう思えば、今までのように食品を無駄に買って腐らせてしまったり、軽い気持ちで食べ物を捨てたりすることはできなくなるはずです。私が食品ロスを減らすことが、直接飢餓問題の解決につながることはないかもしれません。しかし、国際的に様々な取り組みが行われています。この取り組みに協力し活性化を助けることは、私たち一人一人の意識にかかっています。食べるというあたり前のことに感謝し、食品を無駄にしないという小さなことから始めようと思います。

優秀賞(山口県ユネスコ連絡協議会長賞)

国と国が仲良くするために、自分には何ができるか。

光市立島田中学校3年 山中 琴水(やまなか ことみ)

当たり前って何だろう。毎日お腹いっぱいご飯を食べて、学校に通う。クラスには友達がいる、家に帰れば家族が待っている。こんな日常が私にとって「当たり前」で、それ以外の生活は想像がつかない。しかし、今から約七十年前の日本で国民が送っていた日常は、私の「当たり前」とはかけ離れたものだった。

私がこのことについて考え始めるきっかけとなったのは、学校の歴史の授業だ。当時世界では、大きな戦争が頻繁に起こっていた。戦争によって強さを示し、戦争に勝つことが国際的な地位を高める手段だったのだ。日本もそれに乗り遅れないために、躍起になって他国との戦争や植民地獲得に動いていた。戦争が激しくなるにつれて、国民の生活もどんどん苦しくなっていく。私が思い浮かべた日常とは程遠い生活。配給される少量の食料で飢えを凌ぎ、学校に行くこともできない。友達や家族と離れ離れになる。いつ落とされるかも分からない空襲に怯えて、一日一日過ごすこともやっとな生活。想像を絶するような当時の日々に、私は言葉もなかった。国のため、ただそのために辛い我慢を強いられてきたのだ。私自身戦争を経験したことはなく、私の身の周りにも戦争を経験した人はほとんどいない。でも、祖父母からその両親の話をきくことがある。そのころ、人としての権利を無視された人々は、どんな思いでいたのだろうか。日本だけでなく、世界のたくさんの国で、その国のために権利を侵された人が大勢いたはずだ。

自分で調べていくうちに、戦争は兵士に身体だけでなく精神的にも非常に大きい傷痕を残すことを知った。戦場で多くの兵士や一般市民が亡くなってしまうのは知っていた。しかし、もし生きて帰ってくることができたとしても、ずっと苦しい記憶に悩まされ続けることを知り、改めて戦争の恐ろしさを感じた。人を殺めてしまったという記憶、目の前で仲間が亡くなってしまったという記憶。その記憶たちは、一生その人についてくるものなのかもしれない。戦争は生き残った人のその後の人生さえも狂わしてしまうものなのだ。また、身体に傷を負った兵士は一家の名誉であるとして迎え入れられるが、心に傷を負った人は一家の恥とされていたという資料を見つけた。国のために戦ったことに変わりはないのに、傷の負い方で変わってしまう周りの対応に私は怒りさえ覚えた。

戦争は怖い。戦争はしてはいけないことだ。それはきちんと分かっているつもりだし、実際にとっても嫌なことだと思う。でも私は、戦争について知らないことが多かつ

た。学校の授業で習ったとしても、当時の人々の苦しみや思いは、想像することしかできない。国のためだという理由で、個人の意志が尊重されない時代を作った戦争は本当に恐ろしい。戦争は人々の人権を奪い、破壊していく。しかし、戦争を生み出すのも人間だ。だからこそ、戦争を防ぐことができるのも、人間だけだと思う。今までの戦争の痛みを知ったのなら、戦争で何も解決することなどないということも、知ったはずなのではないだろうか。苦しみの種をまく戦争ではなく、世界に笑顔の種をまけるような未来を作っていきたい。そして、戦争の記憶を風化させないためにも、戦争の経験者の話をもっと多くの人に聞いてもらうべきだと思う。後世へ語り継がれる物語。決して幸せな物語ではないし、そこにはたくさんの苦しみがある。でも、もう二度と世界を悲しみに染めさせないために、戦争についてもっと知る必要がある。私はときどき、毎日が繰り返しのよう気がして、嫌になることがある。しかし約七十年前には、明日何が起こるか分からない恐怖に怯えていた人がいた。それを知り、今まで多くの人々の努力によって築かれた穏やかな日常を大切に、そして守り続けたいと思えるようになった。これから、世界中で「人権」が保障されることが「当たり前」になる社会を目指していきたい。

特別賞(国際ソロプチミスト山口賞)

国と国が仲良くするために、自分には何ができるか。

光市立島田中学校3年 青木 伶太郎(あおき りょうたろう)

最近、街で外国人を見かけることが多くなった。東京や福岡などの都会ならともかく、私の住む山口の田舎でも見かけるようになった。テレビでも外国人が日本は素晴らしいと言っているのをよく見る。私は、日本に住んでいて日本という国は素晴らしいと思うことは多々あるが、外国人にも言われているぐらいなら、本当に素晴らしい国なのだろう。

日本が外国に認められるようになった理由の一つに、日本人の精神が含まれていると思う。日本人の精神に「侘び寂び」というものがある。静かで、厳かで、控えめな日本の独特の文化である。私は、この文化が好きだ。お礼や見返りを求めず、自分から目立とうとせず、精神を磨き上げる。

そしてもう一つ。日本人の新しいものを生み出す想像力と、それを作る技術力だ。これがあつたからこそ、外国に認められたと思う。私は、日本人が生み出したものの中でも、特に和製英語が好きだ。フロントガラス、シャーペン、ジーパンなど、日本人が日常的に使っている英語の多くは和製英語だ。様々な考え方があつるが、私は、和製英語は英語ではなく日本語だと思う。もとは外国の言葉だが、それをもとにして新しいものを作り出す。外国のものを取り入れながら日本独自のものを作り出す。和製英語を作り出した日本人は、日本人らしい想像力のある人だと思った。

しかし今、日本にしかない大切な文化が、若者に伝わっていないと思う。今の中高生は生まれた時からグローバル化が進んでいて、国境を越えて様々な文化が日本に流れ込んできた。和製英語は普段から使っているだろうが、昔から存在する日本の文化はどこへ行ってしまったのか。精神を磨く「侘び寂び」という素晴らしい文化はどこへ消えたのか。

今の若者は、自分が面白いと思ったら、言いたいことをなんでも言う。たとえそれがいじめや犯罪につながるようなことでも。私たちは、何を言ったり、やったりするときは、しっかりと考えなくてはならない。自分の言動で傷つく人はいないか、外国人の日本に対する評価を下げてしまわないかを。私は、日本人も外国人も認める日本の一番素晴らしいところは言葉の美しさだと思う。似ている意味の言葉でも少しだけ違う意味で、言葉の並びや響きでどんな気持ちも伝えられる。しかし、学校や街で中高生たちが使っている言葉を聞いていると、美しくない使い方使っていないか、考え直す必要があると思うことがある。

外国人の日本に対する評価が下がれば、その国の日本に対するイメージは悪くなる。そのことが日本に伝われば、日本のその国に対するイメージは悪くなるだろう。そうなることを防ぐためにも、今の日本人は、自分の言動を考えなければならないと思った。

そして、日本が外国の素晴らしさを見つけることも大事だと思った。その国の素晴らしさを少しでも見つけられれば、その国全体が素晴らしく見えてくる。互いが認め合うことで、日本と海の先の国々はもっと仲良く、もっと繋がれるはずだ。

落語、漫画、科学技術…。日本で生まれた文化や技術は、今や世界中で認められ、親しまれている。日本人としてとても誇らしいことだ。しかし、さらに日本の厳かで美しい文化を広めると同時に、自分たちを見つめ直さなければならない。どの国の人に見られても恥ずかしくない、侘び寂びの精神を持った日本人らしい人間になりたいと思った。